四高開学120周年記念展示

学都金沢と第四高等学校の軌跡

編集：金沢大学資料館・金沢大学附属図書館

開催にあたって

明治十九年（一八八六）四月、初代文部大臣森有礼のもとに公布された「中学校令」に基づき、北陸地域（第四区）に高等中学校（旧制高校の前身）を誘致するための猛烈な運動を展開しました。政府への嘆願は言うに及ばず、準備すべき資本金十万円余を、地元関係者からの寄附により短期間で達成し、翌二十年四月認可、同十月開校式が挙行され、ここに第四高等学校六十余年の歴史がスタートしました。その県民一丸となった歴史的誘致運動の開始から数えて、本年は百二十年目に当たります。また、八月末、四高同窓会と金沢大学同窓会を結びつける「同窓会連絡協議会」が発足し、今再び、旧制第四高等学校に県民の注目が集まっています。

今回の展示は、こうした第四高等学校と金沢という街のつながりを見つめ直し、改めて現在の大学と地域との関わりを考える機会となるよう企画したものです。そこで、初の試みとして、大学と石川近代文学館の二会場同時開催、かなざわ・まち博２００６開催委員会との共催を実行しました。これによって、「地域に開かれた大学」という本学の理念が広く理解されることを望んでいます。

本展示の趣旨をご理解いただき、様々なご協力をいただいた方々に感謝いたします。

金沢大学資料館
金沢大学附属図書館

目次

開催にあたって

金沢大学同窓会と四高同窓会（橋本哲哉）……1

第四高等学校から金沢大学へ、地域の文化シンボル（谷本宗生）……2

第四高等学校の歴史……4
コラム・四高以前の加賀藩・石川県の教育（江森一郎）

さまざまな部活動……6
コラム・日本学生サッカーの隠れたルーツ（大久保英哲）

金沢の街と学生生活……8
コラム・終焉期の四高生活（正橋剛二）

第四高等学校の教育と学問……10
コラム・渾天儀（竹村松男）
コラム・四高の文芸（丸山珪一）

出品目録……14

年表……16

金沢大学同窓会と四高同窓会

橋本哲哉

残暑のいまだ続く八月二十八日、金沢市内において金沢大学同窓会（正確には同連絡協議会）の発会式が行われた。これまで大学の学部単位に組織され活動してきた各同窓会を、念願かなって全学連合化することになったわけである。会則中「本会は、金沢大学及びその前身校とそれらの同窓会並びに同窓生を結ぶ組織として、金沢大学の発展と社会への貢献を図るとともに単位同窓会相互の交流、親睦等を目的とする」と謳っている。金沢大学とその前身校の歴史にとって誠に喜ばしい出来事であったといえよう。

金沢大学は、平成十一年（一九九九）、新制国立大学として創立五十周年を迎えたが、記念日の五月三十一日を中心として盛大な記念式典を執り行った。その記念事業の目玉の一つとして『金沢大学五十年史』（部局編・通史編の二巻構成）の刊行が企画された。編集のとりまとめを私が担当したが、あれからすでに七年余り、間に国立大学法人への移行と新たな歴史をも経験して、その時の速さにいささかの感慨を禁じえない。

ところで『金沢大学五十年史』編纂に当たって、本学の戦後発足に諸前身校が果たす役割がまことに大きく、したがってその前身校史を重視するという方針を掲げた。主な校名を列挙すると、金沢医科大学、第四高等学校、石川師範学校、金沢高等師範学校、金沢高等工業学校などである。これにはまたそれぞれ固有の歴史があったが、ここでそれらをひも解く余裕はない。医科大学の歴史と医学・医療に対する業績の重みは誇るに足るもので、四高をはじめとした高等学校群の実績も全国有数であった。そうしたすばらしい前身校の歴史の全体像をはじめて公にすることができたわけである。この大学史編纂事業にかかわりながら、私は大学・学部という組織の歴史の統合にとどまらず、現実の同窓会の統合ができないものかと、密かに夢想したこともあった。

また『金沢大学五十年史』は、はじめての本格的な「第四高等学校史」であったともいえよう。それは近年旧制高等学校史の歴史研究が進んでいたという絶好の背景があったが、専門研究者を執筆の陣容に招じ入れることができたという幸運にも恵まれた。さまざまな意味を込めて作り上げた『金沢大学五十年史』、その分厚い頁をぜひともめくっていただきたい。

金沢市の中心の中央公園脇に、石川近代文学館という県の施設があるのをご存じの方は多いと思う。この建物は四高の赤レンガ造りの歴史的建造物を保存したもので、旧制高等学校の校舎としては全国的にも希少な存在である。その一角に四高記念室と四高同窓会がある。記念室には四高の歴史や代表的な卒業生、また歴史的資料が展示されおり、かつて金沢の町に愛された学校の雰囲気が伝わってくる。さらに、四高をはじめとした前身校を得た金沢が、全国的に「学府」「学都」として名をとどろかせた謂れを体感することができる。四高の関係資料は金沢市内に数多く残されているため、その統一目録化と一体的保存が以前から望まれていた。前述した大学史編纂の折、そのことを踏まえて金沢大学は『第四高等学校関係資料リスト』をあわせて出版した。

今秋の十月二十二日、伝統ある四高同窓会は「開学百二十年祭」を金沢で挙行する。それを機会に同窓会活動の主体を前記金沢大学同窓会に委ねるお考えと伺っている。一方、市民の間からは石川近代文学館を「四高記念館」に、というありがたい声援をいただいている。もちろん四高ゆかりの赤レンガは金沢大学として大切にしていきたいが、と同時に「学都」のシンボルとしても、美しくあり続けてほしいと願っている。

（金沢大学理事・副学長）

第四高等学校から金沢大学へ、地域の文化シンボル

谷本宗生

第四高等学校の軌跡

明治二十年（一八八七）四月、第四高等中学校が第四区内（新潟・富山・石川・福井の四県）の金沢に設置される。これは、当時の石川県知事岩村高俊らを中心とした地元地域社会による誘致の働きかけ（文化政策）が大きく影響している。高等中学校の誘致獲得は、戦前期をとおして北陸金沢の文化的優位性を全国的に顕示する結果となり、「北陸総合大学」設置の動きにおいてもその起点となったといえる。昭和二十三年（一九四八）五月の「北陸総合大学（金沢大学）設置認可申請書」の冒頭には、「金沢市は藩政の昔より学問、美術工芸の発達をもって聞え、北陸地方における文化の淵藪として幾多の碩学、名匠を輩出した。この伝統は現在に至るまでなお現存し、今や北陸における中心的文化都市として、政治・経済・学芸の中枢たる不動の地位を確保している。」と明記されている。

明治二十年八月には医学部医科が、明治二十二年四月には医学部薬学科が、第四高等中学校に併設される。全国的にみて、当時各県の医学校や薬学校が廃止されていく趨勢のなかで、高等中学校の医学部（医・薬学科）も北陸の金沢に集積されたことは、後に地域医療の拠点となる金沢医科大学（現金沢大学医学部）の発展を支える土台となった。明治二十七年七月には、「高等学校令」に基づいて大学予科及び医学部を置き、第四高等学校と改称。明治三十四年四月、医学部を第四高等学校から分離独立させて、金沢医学専門学校とした。これによって、高度な普通教育（教養教育）と専門教育との機能が明確に区分され、第四高等学校と金沢医学専門学校がそれぞれに発展していく。しかしながら、両系譜は戦後の学制改革で、再び新制国立大学の金沢大学として相交わることになる。

明治二十年十月、文部大臣森有礼臨席のもと、第四高等中学校の開校式を挙行する。森下森八ら地元有志二〇四名、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』（ブリタニカ大百科事典）を第四高等中学校に寄贈。翌二十一年三月には、学校の敷地を広坂通り、仙石町及び西町二万余坪に決定した。明治二十五年四月には新築校舎が落成し、翌二十六年十月には寄宿舎・時習寮も開設した。学校創設費の総額は十一万七二五三円（建築費九万四〇〇〇円、敷地購入費一万九〇二五円）で、旧藩主の前田利嗣から七万八〇二三円、残りを地元有志からの寄附金でまかなった。

近代化を促進する明治から、産業化・都市化・国家総動員体制の時代のなか、第四高等学校も時々の時代・社会情勢が垣間みられた。昭和の敗戦を迎えた昭和二十四年（一九四九）五月、「国立学校設置法」により金沢大学に包括されて、金沢大学第四高等学校となった。翌二十五年三月、六十年以上にわたる歴史に幕をおろし、全国の旧制高校とともに第四高等学校も廃校された。その間、一万二千余名に及ぶ第四高等学校卒業者・校友を輩出した。

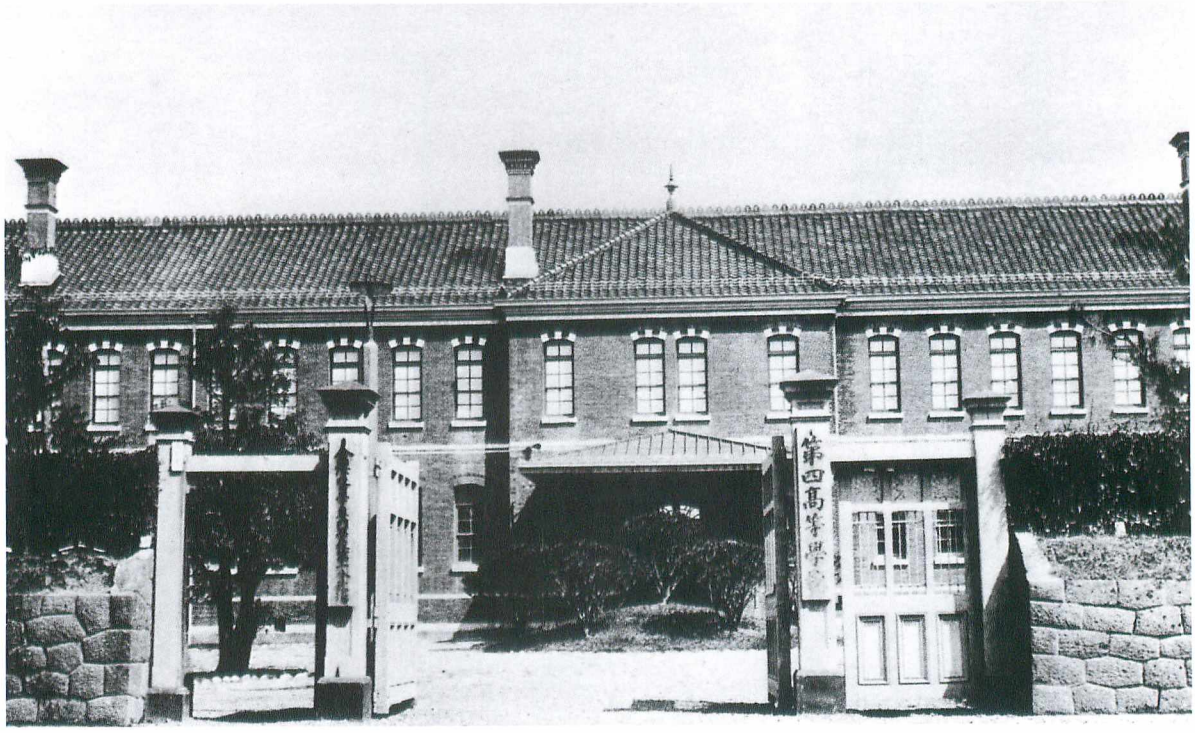
北陸総合大学＝金沢大学の設置

昭和二十四年（一九四九）十月、第四高等学校最後の記念祭において、校長伊藤武雄が自らの心境を率直に語った、次のような「あいさつ」を行っている。「停滞は存在しない、前進あるのみである。いや、彼ら〔四高生〕ばかりではない、われわれはみんな過去に恋々たることをやめて、新しい歴史の光栄ある登場人物とならなければならないのである。」（記念祭プログラム）たしかに、第四高等学校が新制国立大学の金沢大学に包括統合されることに対して、当時充分な共通理解（コンセンサス）が形成されていたとはいいがたいが、戦後の学制改革のなかで、不安や希望を抱きながら新たな歩みを、自ら学校として地域として、模索・志向した点は高く評価したい。

「いまのままでは高等学校や専門学校はどうしても存続していけない。学制改革はそういう強い圧力を高校や専門学校のうえに加えて、その方向を指示しているわけなんだ。(略)学校自身の意思が要請され、自主的にその基準にかなう体制をこしらえる必要がある」(校長鳥山喜一「新大学への空想」『文華』第二七号、一九四八年四月)というように、戦後直後から北陸総合大学設置の議論が進展していく。地元の北國毎日新聞社が、昭和二十二年十月に旧日本軍が接収していた金沢城址の跡地利用に関する世論調査を実施したところ、レクリエーション施設一九%、新制中学校建設二五%、北陸総合大学四七%という結果で、北陸総合大学を望む世論が圧倒的に高いことが報道される。金沢大学の創設費(営繕費及び設備費)の総額は八六〇〇万円で、四分の一近くを地元寄附金等でまかない、残りは県費負担している。

金沢大学は、戦後の学制改革によって発足したものであるが、第四高等学校をはじめとした多くの高等教育を担った郷土の前身各校の礎のうえに成り立ったものであること、またその理念(建学の精神)は「北陸地方文化の振興・文化日本建設への寄与」といった「北陸総合大学」に起因することなど、今後もけっして忘れてはならない。

(東京大学史史料室)



1.明治中期の四高正門と本館

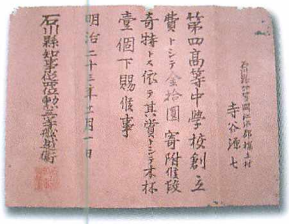
第四高等学校の歴史

旧制高等学校は、第二次世界大戦直後まで存在した男子の高等教育機関である。帝国大学の予備教育段階としての性格を持ち、授業や寮生活では、教養主義や自治・自律の精神が重要視され、日本の近代国家を担う少数エリートを養成する学校として自他共に認める存在であった。

明治十九年（一八八六）「中学校令」により、全国に五つの高等中学校（ナンバー・スクール）設置が定められた。第四区（新潟・富山・石川・福井）の石川県では、官民一体となった熱心な誘致運動を行い、その甲斐あって金沢に第四高等中学校が設置されることが決定する。翌二十年開学。当初、旧石川県専門学校の校舎を使い、同二十六年に現存する赤レンガ造りの校舎が完成した。同二十七年「高等学校令」で第四高等学校と改められ、廃校まで約六十年間金沢の街の中心で存在感を示すことになった。四高では、哲学者西田幾多郎はじめ政治家河合良成、正力松太郎、小説家井上靖など多くの人材が学び、多感な青春時代を送っている。

四高の基礎が確立したのは、第五代校長北條時敬の時代である。北條が中心となった「三々塾」など公認下宿の設立は、全国的に見て四高の特色を示す一つとなったという。また、明治三十年代末から、生徒自身による自発的な校風確立運動が盛んになり、「時習寮」の火災や、南下軍の遠征、寒潮事件を契機として、四高の校風を象徴する「超然主義」が誕生した。この精神は、自治・自由を重んじる「時習寮」を中心に体現されている。大正元年（一九一二）から十一年間、第七代校長溝淵進馬のもとで四高は最盛期を迎えた。精神と身体の鍛錬を重視する溝淵の教育は、柔道部の全国大会七連覇など運動部の活躍を促した。昭和に入ると、戦時体制化する社会の中で四高の軍事化も進んだが、それは自治を重んじる校風と相容れず、多くの対立を生じさせている。戦後は、連合国による「民主化」政策を背景に、新教育制度のもと昭和二十三年（一九四八）に旧制高校の廃止が決定、翌年新制金沢大学へ包括された。

2.高等中学校資本金醵集趣意書
明治19年12月



3.第四高等中学校創立基金寄附感謝状
明治23年11月1日

Column

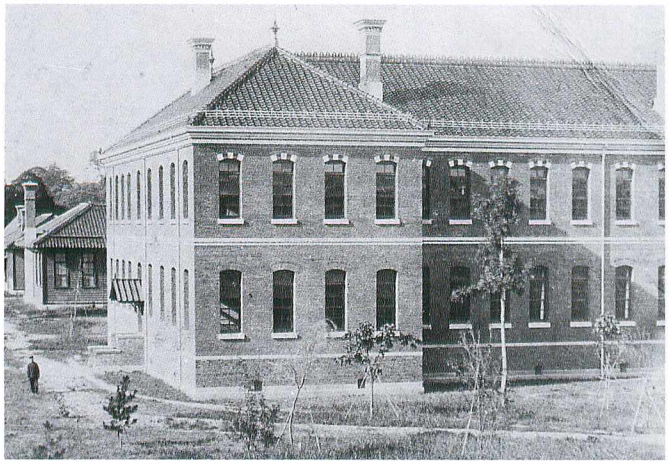
四高以前の加賀藩・石川県の教育

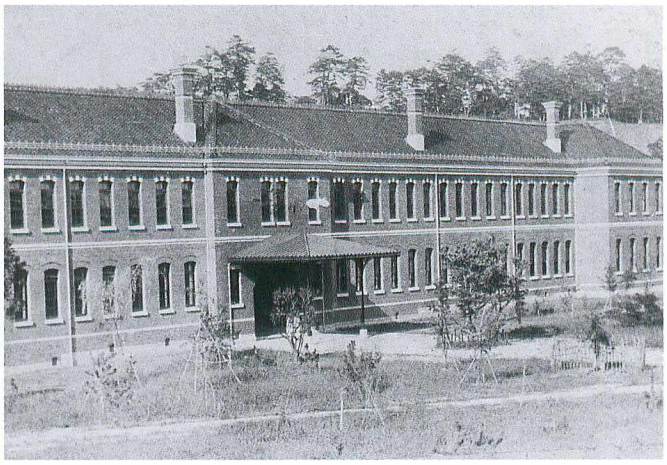
江森一郎

加賀藩は日本一の大藩で、前田家以外にも大名クラス（一万石以上）の「八家」があり、それぞれが、儒者・医者など専門家を抱えていた。また中級以上の藩士は天保中期以後藩校・明倫堂の入学が義務づけられ儒学の試験を課せられた。下級藩士や陪臣の子弟も負けじと勉学に励んだようだ。寺子屋も普及していた。また、和算の教育も盛んだった。したがって、明治二年（一八六九）の版籍奉還後金沢藩となっても、明治四年の廃藩置県後金沢県（明治五年～石川県）になっても、金沢市域では「読み・書き・算盤」の伝統的基礎教育を行う教師の人材不足に悩むことは少なかったようだ。

しかし、文明開化をリードする洋学の教師には他藩と同様に困った。安政元年創立の加賀藩の壮猶館は、洋学の摂取につとめたがその関係者のみの力で洋学の教育はできなかった。そこで財源逼迫下、高額の給料を払ってオーズボン（明治二年、七尾軍艦所）、スロイス（明治四年、金沢医学館）などを招聘した。彼らから懸命に学んだ高峰譲吉、桜井譲二（我が国最初の理学博士、日本の近代化学の父）や医学生など当時の学生の多くが、後に中央や地域で活躍する著名人となった事は、すでに知られていよう。

そもそも石川県は、その成立初期から地域独自で広い範囲の高等教育が受けられるよう特に





4.第四高等中学校本館
完成直後。建築家山口半六による設計。昭和44年より国の重要文化財に指定されている。

5.第一部三年文科生卒業記念写真・明治35年
前列中央が北條時敬校長。
2列目右から4人目が西田幾多郎教授。

大きな努力をしてきた地域である。百万石の誇りと幕末・維新期の動乱で主導的役割を果たせなかった事への悔恨とがない混ざり、新時代は教育・文化面での貢献を志す雰囲気が強かったらしい。金沢中学校(明治四年～)、英仏学校(明治六年～)、啓明学校(明治九年～)、中学師範学校(明治十年～)、石川県専門学校(明治十三年～)などと制度変化の荒波に処しつつ地元独自の中・高等教育を維持・充実させてきた努力は、並々ならぬものがあったと思われる。

四高の源流とも言える石川県専門学校も県財政の逼迫から閉校の間際まで行ったこともあるが、この学校も西田幾多郎、鈴木大拙をはじめ多くの学者、専門家を育てた。

私は、森初代文相が五箇所の高等中学校(旧制高校の前身)創立にあたり東京、京都、仙台、熊本とならんで金沢の地がなぜ選ばれたかを考察したことがある。前田家からの高額の寄付金(七万八千円余)があったという条件のほかに、優秀な学生がすでに多く養成されていたことを挙げ、それを学生数で実証したつもりである(詳細は、「明治中期までの石川県教育の一面―当時石川県からなぜ多くの高等教育進学者を輩出したか―」『市史かなざわ』第十号、二〇〇四参照)。金沢大学に継受された四高が「もし金沢に存在しなかったならば」と考えることなど想像もつかないほど四高の存在は大きかったと言って間違いなかろう。

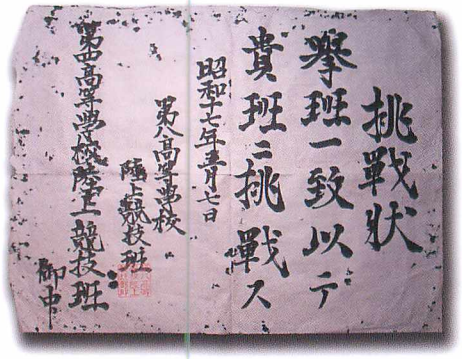
(金沢大学教育学部教授)

さまざまな部活動

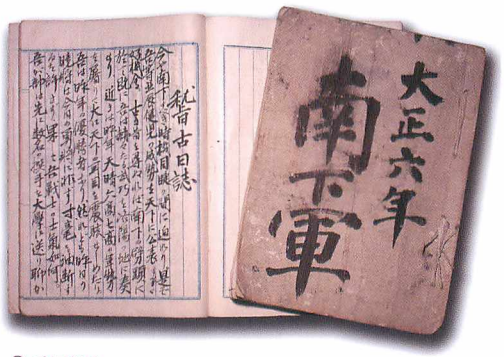
明治二十五年（一八九二）年「第四高等中学校学友会」が創設された。学友会は「会員の美徳を養成し一致協同以て校風を発揚し併せて身体知識の発達をはかる」ことを目的とし、運動部と学芸部が置かれた。これが四高における部活動の端緒となる。明治二十八年には、学友会に代わり「北辰会」が結成された。

運動部を代表するものには、柔道部、剣道部、野球部、漕艇部などがあり、対校戦も盛んに行われた。三高などとの対戦のため、京都へ向かう「南下軍」の意気盛んな姿は、後世まで語り継がれている。また、雑誌部が刊行していた『北辰会雑誌』には、小説や詩などの文芸作品に加え、教授の論文なども寄せられ、当時を知る貴重な資料となっている。

6.八高勢を迎えて市中行進・昭和7年



7.挑戦状
八高（現名古屋大学）陸上競技班からの挑戦状。八高とは定期的に対校戦を行っていた。この年は敗戦。



8.南下軍
柔道部の稽古日誌。柔道部は大正3～9年まで全国大会で7連覇を成し遂げる。

Column
日本学生サッカーの隠れたルーツ
―四高の外国人教師によるサッカー指導―

大久保英哲

明治初期、東京大学（大学予備門）に英国人ストレンジという人がいた。明治八年（一八七五）、来日し、英語を教えた。ストレンジはケンブリッジ大学時代からスポーツに親しみ、東京大学にあっても、陸上競技、ボートなど種々の英国流スポーツを伝えた。明治十六年六月十六日に帝国大学で行われた第一回陸上運動会はストレンジの指導によるものであり、内容はトラック&フィールド、すなわち陸上競技であった。この意味で、ストレンジは日本陸上競技の生みの親と言われる。

四高にも同様に英語やドイツ語など主に外国語を担当する御雇い外国人教師がいた。明治二十年から昭和十七年（一九四二）まで三五人に及ぶ。イギリス人十人、アメリカ人十人、カナダ人三人、ドイツ人九人、フランス人二人、オーストリア人一人である。

東京大学のストレンジと同じように、明治期の四高の学生たちにスポーツを指導した人物がいる。その代表的な人物にデ・ハビランド（W.A.De Havilland）がいる。

デ・ハビランドは四高の後、東京高等師範学校に転じ、東京高等師範学校のサッカー部の基礎を作った人物、つまり日本の学生サッカーの草分けとして、日本サッカー史上に名を知られて

いる。そのデ・ハビランドは実は四高においてもサッカーや各種のスポーツを指導しており、四高はこれまで知られていないが、日本サッカー史上の隠れたルーツなのである。

デ・ハビランドは、四高採用時の書簡や履歴書によれば、明治四年スコットランドに生まれ、ケンブリッジ大学を卒業している。明治二十八年来日し、神戸・乾行義塾で教えていた。明治三十一年八月から明治三十七年七月まで六年間第四高等学校で英語学、英文学を担当した後、東京高等師範学校に転じたことになる。四高での給料は月二二五円(後三〇〇円)のほか宿料として月十円支給されていた。この当時の四高校長でさえ年俸が三千円であるから、校長を凌ぐ高給で優遇されていたことが分かる。

さてデ・ハビランドは、四高にあって、ボート、フットボール、綱引き、運動会、二輪車競争などに活発な指導を展開している。四高運動会の四丁(四〇〇m)競走、二人三脚競走に賞品やメダルを提供し、自らも職員競走に出場して圧勝したり、中目教授との綱引きを行って一進一退の攻防を行った記録が残されている。また北辰会雑誌二五号(明治三十二年十二月十五日発行)に「on university rowing(大学のボートについて)」という論説を寄稿し、ケンブリッジにおけるボート活動の概要、ボートの構造、トレーニング方法について、四高の金石での活動と比較しながら紹介している。

また、北辰会雑誌二一号(明治三十一年十二月二二日発行)には次のようにデ・ハビランドがサッカー指導を行った様子が記されている。「北風が強く吹きさし、草は枯れ、葉は落ちている。まさに風景は冬景色である。人々は寒さを逃れるために火のそばに集まっている。その時、何事か校庭から叫び声が聞こえてきた。それは新任のデ・ハビランド先生で、デ・ハビランド先生は創設に関わったフットボール部にいたのであった。デ・ハビランド先生はケンブリッジでフットボールをやっており、チャンピオンにまでなった人であった。先生はいつも言っていた。「It is no matter, hailing, snowing, raining. Come and play!(雨だろうがあられだろうが雪だろうがそれがなんだ。さあやるぞ(拙訳)。)

まさしく、デ・ハビランドのこの呼びかけは日本学生サッカーの幕開けを告げる名句として記録されるべきであろう。

さてこのデ・ハビランド先生は四高ばかりでなく、明治三十五年十月五日石川県立第二中学校に出かけ、「足球部」発会式に参列している。午後二時から二十分間の試合時間で紅白試合が六回行われた。この四、五、六「戦争」に「デ・ハビランド、ウォルファールの二氏互いに別れて両軍のゴールキーパーとなる」と校友会誌二号(明治三十六年)に見えるからである。

この石川県立第二中学校でデ・ハビランドとともにゴールキーパーをした「ウォルファール」(ウォルファルト)(Ernst Wohlfarth)もまた四高の外国人教師である。明治六年ドイツ北部ロイス公国チールバッハに生まれている。すなわちデ・ハビランドより二歳若い。明治三十四年十二月から大正十年(一九二一)七月まで二十年間にわたって四高のドイツ語・ラテン語を担当した。給与はデ・ハビランドと同額(二五〇円、後三〇〇円)である。明治四十二年にはその功績により勲五等双光旭日章を授与されている。

残されている履歴書によれば、ウォルファルトは「ブラウエン」市の師範学校で六年間修行した後、明治二十七年学校教師採用試験に合格、助教師となった。さらに明治二十九年には検定試験を受けて本教師となっている。明治三十年にはドレスデンにおいて体操教師の試験に合格し、明治三十二年にはライプチッヒの教師となり、同市の大学で講義を聴講している。来日の経緯等については明らかではないが、四高が最初の赴任校のようである。ウォルファルトがスポーツに堪能であったことは、体操教師の資格を有していること、明治三十五年十月二十六日に開かれた石川県立第二中学校第三回秋季陸上運動会に出かけ、来賓スプーン競走に三名の入賞者の一人として名前が出ていることからも分かる。

デ・ハビランドとウォルファルト、この二人の外国人教師が互いにゴールキーパーを行った二十分間ずつ三回のサッカーは、おそらくかなり本格的な競技形式であったと考えてよいであろう。また東京高等師範学校では、デ・ハビランドが東京高等師範学校に転じた翌年、明治三十八年十二月十日、かつて四高でデ・ハビランドにサッカーを習い、東京高師へ進んだメンバーと東京高師チームとの試合が行われ、これが東京高師の対校試合の始まりとして記録されている。つまり、四高は日本学生サッカー史上、知られざるルーツの地なのである。

9.北陸大会優勝の蹴球部・昭和14年

(金沢大学教育学部教授)

金沢の街と学生生活

学生の街金沢。北陸三県のみならず、日本全国に名をはせた「四高」に集まってきた学生数は明治、大正、昭和の三代を通して約一万二千人である。

全国各地から集まってきた生徒を収容する施設として寄宿舎「時習寮」があった。明治二十六年（一八九三）に現在の県庁跡地側にまず南寮、後に中寮・北寮が完成し、明治期としては先端をゆく電燈がひかれていた。三棟二階建各八室、一室六名ないし八名で収容総数約一九〇人の寮である。

この寮の特色は、後に四高の校風ともなった「超然」を唱え、「自ら重んじ自ら治むる」学生自治が実行されていたことである。寮歌にストームそして怪談。寮での生活は学生生活に大きな影響を与えている。

四高は広坂に広大な敷地を占めており、校門から一歩出ればそこは金沢の中心街香林坊である。学生たちは、授業が終わると、朴歯下駄を履き、マントをひるがえし、古本屋をのぞき、喫茶店で煙草片手に熱く議論し、金沢の街を闊歩した。市民はそんな四高生を好感をもって迎えた。

また四高には、この寮とは別に公認下宿である塾があった。これは北條時敬校長の発意により、明治三十三年に「三々塾」が設置された。ここでは西田幾多郎ら教授が中心となり指導にあたった。これに刺激され相次いで「若越義塾」、「中越義塾」といった出身地、「野球部誠之塾」という運動部で構成された塾が多数設立された。この少人数からなる塾制度は、全国の高等学校の中でも四高の特色である。

四高生達は、夏季の長雨、冬季の降雪と金沢の風土に悩まされたが、暖かい市民の愛情に育まれ巣立っていった。

10.三々塾の師弟
明治42年6月

11.三々塾誌
明治33年から昭和22年

Column

終焉期の四高生活
—萬年ぐつ事件—

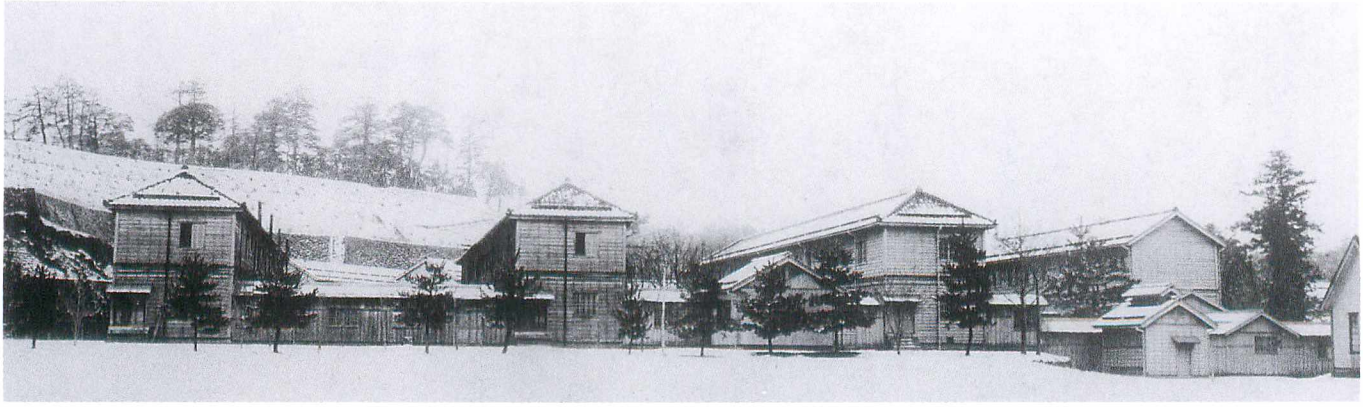
正橋剛二

実際は事件という程のものではなかったのだが、日がたつにつれ波紋は広がった。昭和二十二年（一九四七）梅雨上がりの昼下り、南寮一号の新寮生三人、M、T、Xは午前の授業が終り寮へ昼飯に戻って来た。折しも中から出てきた旧寮生O、T両氏とパッタリ出会った。「おい、※メト喰いに行こう」両氏は賄のスイトンを食べたばかりだが、腹の虫はおさまっていなかったのだ。三人はメトで下ごしらえをしてからスイトンで仕上げをと考え、廻れ右して先輩に従った。入寮の時貰った筍草履はとっくに履き潰していたし、代わりがなかった。

校門を出て目指すは片町の※プロ食。A紙支局のあたりで誰か後ろから写真を撮ったようだったが、気にも止めなかった。

翌朝の地元紙で写真入り記事となり、三日遅れで全国紙にも波及した。しかも後者ではまことに不当な記事に化けていた。写真の帽子がM君（文乙）、二宮金次郎のように本を読んでいるのがT君（理甲）である。

日ならずして、和歌山の一少女から手紙と夜なべに作ったという草履が学校へ届いた。夏休み目前に、訓話好きのT校長は早速全校生徒を集め、いささか片手落ちの御

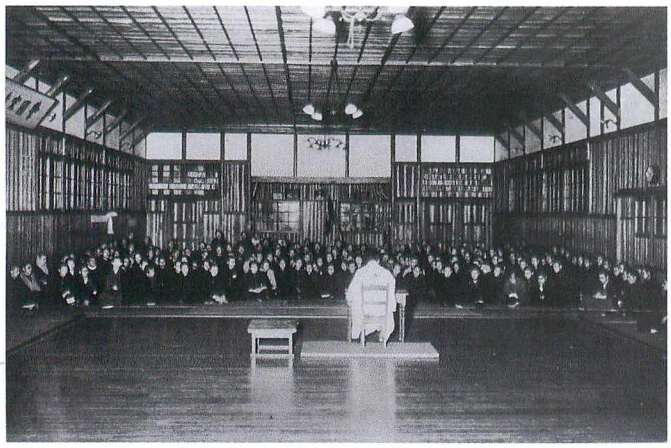


12.雪の時習寮・明治42年

「時習寮」の由来は『論語』学而篇第一の巻頭、子曰「学而時習之不亦説乎」からとったもので、命名者は村上長之助教授である。

13.怪談の原稿

怪談の原稿は全部で11編残っており、序章、南寮一号、三号、中寮二号、六号、北寮三号、四号、八号、自習室、無声堂、プール、ドッペリ松にまつわる怪談、終章で構成されている。



14.無声堂での怪談・昭和14

寮では入寮するとまずコンパがあり、その後旧寮生は新寮生を夜の無声堂に集合させた。そして真っ暗な無声堂で怪談が始まる。

説教に及んだ。南一からは校長室へ情況説明と異議を申し立てた。非は取材もなしに、盗撮写真に勝手な記事をデッチ上げた某全国紙にあり。一言無かるべからずと。しかし、T校長は動く気配がなかった。結局南一から代表者が支局へ抗議し、詫びを入れさせて決着をつけた。

鰻のぼりの超インフレと食料の遅配や欠配に苦しんだ頃の四高の話である。皮肉なことに卒業後朝鮮戦争が始まり、状況は急速に回復に向かった。

後年、この一件を話した時、T君は「ハダシで大道をカッ歩してそのまま銭湯に入り、再びそのまま惜しみもなく出て来た不思議な足の裏の感触を思い出す。」と所感を述べるのだった。

※四高生用語

（四高昭和二十五年理甲卒）

ままよ萬年グツ

15.「ままよ萬年グツ」
北國毎日新聞・昭和22年6月19日

第四高等学校の教育と学問

旧制高等学校では、何をどのように学んでいたのか。戦前の学制は、現在の六（小学校）・三（中学校）・三（高校）・四（大学）制とは異なり、六（小学校）・五（中学校）・三（高校）・三（大学）制で、義務教育の尋常小学校六年間の後は、進学コースがいくつも存在する複線式であった。その中で、旧制高等学校は大学への進学の唯一ともいえるコースであったため、全国の俊英たちが集うエリート教育の場であった。

旧制高等学校は、帝国大学の予備教育機関として存在し、その専門的・高水準の講義に対応できるよう、外国語教育が重視され、また基礎学力の育成がはかられた。今の大学の教養課程にあたる。

四高開学の年である明治二十年（一八八七）の『第四高等中学校一覧』（自明治二十年至明治廿一年）から、当時の授業内容と時間数が分かる。本科第三号学科課程表（文学志望生ニ課スル分）の第一学年では、「国語及漢文」が週三時間、「第一外国語」が週四時間、「第二外国語」が週五時間となっている。さらに、第二年では「羅甸（ラテン）語」週二時間が加わる。国語に比べ、外国語の時間数が圧倒的に多いことからも、当初より外国語教育に力を入れていたことがうかがえる。

また、語学以外の分野においては、第一年では、歴史・数学・地質及鉱物・物理・体操、第二年では、化学・天文・理財学・哲学・体操といった科目がみられる。それらの分野では、専門の教授というよりは、基礎学力の育成に主眼がおかれていたことが、金沢大学附属図書館が引き継いだ四高蔵書約九万七千冊が、各分野の基本的な文献をきちんと揃えた実用的なコレクションとなっていることからも見ることができる。

四高蔵書のほか、物理機器・考古資料・標本類・掛図など、さまざまな授業関連資料が残されており、当時の、実際に行なわれていた授業内容を知る上で、大変貴重な資料となっている。

将来を期待されていた四高生たちは、多くの名物教授のもと、外国語の予習に励み、時には代返を頼んで授業をサボることもあり、部活や遊びに力を注ぎつつも、最後はエリートとしての将来に向けて猛勉強の日々を送っていたのである。

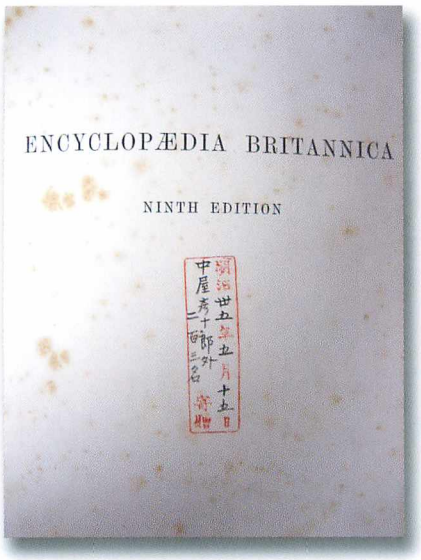
Column

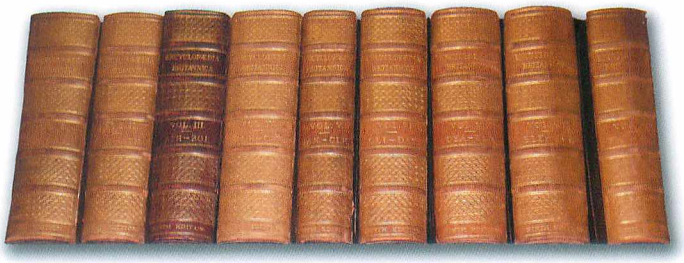
伝・西教授遺愛の 渾天儀（こんてんぎ）［教育用模型］

竹村松男

渾天儀は、天球上に投影された天体の位置を観測、決定する器械で、古代中国で前漢時代以来開発され、太陽、月、水金火木土の五惑星の視運動、二十八宿の位置、時刻決定、暦の作成などに用いられた。他方、古代ギリシャでも渾天儀と同様の観測器械armillary sphereが、独自に発明・使用されてきた。我が国では、奈良時代に伝えられていたが、江戸時代前期頃から、中国の書物にたよって製作され始めた。その中現存するものは、本器以外三七基であるが、実用・観測に供されたものは仙台市天文台所蔵の一基のみで、他は小型の説明用模型で、肝心の目盛りさえ無いものもある。

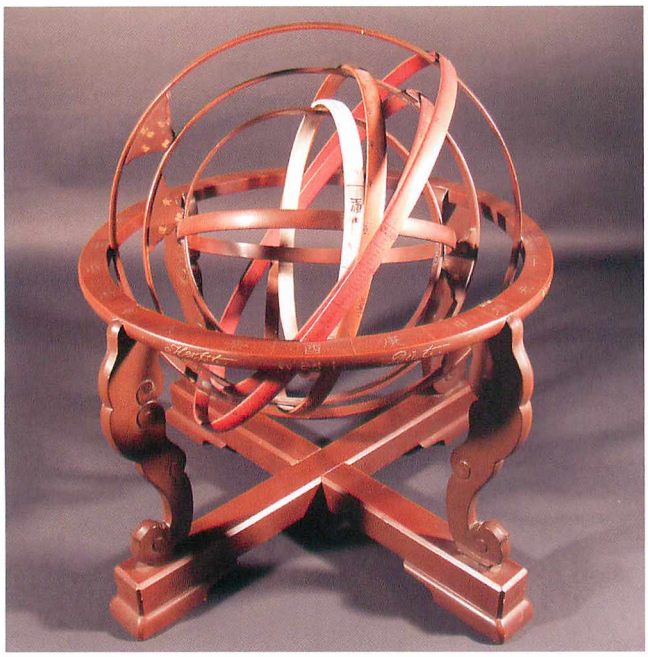
渾天儀の一般的構造は環群の三重構造で、中心に三軸の自由度を持った観測用の「覗き筒」（玉衡）があるが、本器は説明・教育用のものであるので、これを欠いている。外側の環群は、天球上の地平線を表す水平の環：地平環、天球上の子午線を表し北（子）と南（午）を結ぶ環：天経環、天球上の赤道を表し東（卯）と西（酉）を斜めに結ぶ環：天緯環の三環から成り、互いに固定されており、六合儀と呼ばれる。中環の環群には、天球上の経線を表し天の北極と南極を結ぶ環：天経環、天球上の赤道を表す環：赤道



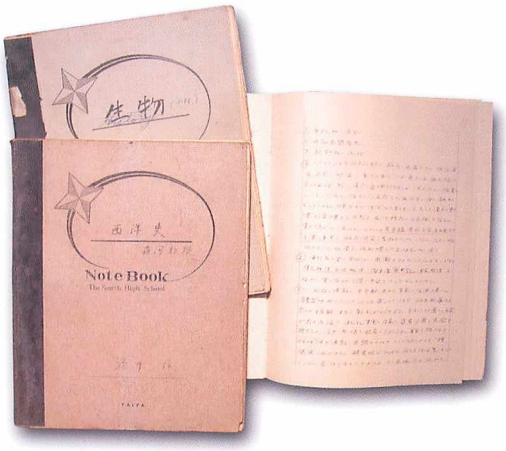


16.The Encyclopaedia Britannica : a dictionary of arts, sciences, and general literature [9th ed]
Adam and Charles Black, 1875-1889, 25v, 29cm
四高蔵書(1:20:14)　「第四高等学校図書」印

明治20年(1887)10月26日の第四高等中学校開校にあたって市民より寄贈されたもの。辞書を開くと、扉には「中屋彦十郎外二百三名寄贈」とある。この寄贈印の小さな枠の中に、204名もの市民の大きな期待がこめられているのである。



18.渾天儀



17.生徒ノート

生徒ノートは、四高の校章入りのものが用いられている。びっしりと講義の内容が書き込まれ、熱心に教授たちの話に耳を傾けていた様子がうかがえる。ただし、巻末には落書きがみられるものもある。

環、天球上の太陽の通り道(黄道)を表し、天の北極と南極を結ぶ軸に六六.五度の角度をなす環：黄道環、の三環が含まれる。内層の環群には、天球上の月の通り道を表す白道環が設けられている。本器には、必要な目盛その他は詳細に刻まれており、現存する説明用渾天儀中の一級品である。

本器は四高物理科長西英盛教授(一九〇〇～一九二六在任)が、私財を投じた遺愛の品を、西教授の教え子で四高物理科主任古谷健太郎教授(一九一七年四高入学、一九二五～一九五〇在任)が受け継いだものと伝えられている。製作者や製作年代は不明であるが、構造上の特徴、地平環の側面にLente(春)、Zomer(夏)などのオランダ語が記されている点などから推測すれば、江戸時代後期の作と思われる。

(四高昭和十四年理甲卒、四高教授、金沢大学名誉教授)

Column

四高の文芸
―中野重治の時代―

丸山珪一

徳田秋声が、まだ高等中学のころの四高に在籍していたことは、彼自身自伝の「光を追うて」などにも書いており、少なくとも金沢では、かなり知られるようになってきたようだが、たとえば漱石の名高い弟子の一人、森田草平も同じく四高にいたこととなると、ほとんど知られていないのではなかろうか。もっとも、かく言う私もただの受け売りだが（超然寮隠士「四高を追い出された人々―秋声、草平、ツルジロー―」、『北国文化』第四二号（一九四九年七月））。作家や詩人にとって、高等学校をきちんと卒業したかどうかは必ずしも重要なこととは言えず、秋声や草平のように一時身を置いていたにすぎないような場合は、何か特異な体験でもなければ、なおさらそうであろう。本人が口にしなければ、ずっと知られないままであってもいっこう不思議ではない。同窓会名簿なども正規に卒業した者だけがふつう載せられるから、後になってそこから発見されるということもあまりなさそうだ。中野重治のエッセイに、かつての仲間の消息を知ろうと、四高の同窓会名簿をパラパラとめくったときのことを書いたものがある。あれだけいっしょに飯を食い、いっしょに酒を飲み、いっしょに勉強もし、ときには喧嘩もしたその相手が消えてしまっている。そこに名がない。「放校されたもの、退学させられたもの、その手の人間がすべて消されている。『なるほどな…』と私は思わぬわけに行かなかった。歴史だの正史だのいうものが、こんなふうにして作られて行くのだな。なにくそ、このスベタめ…」と彼は書いている（「脱けたところ脱けているところ」、全集第二六巻）。いささか中野らしからぬ荒れようだが、どんなにがっくりしたか想像がつく。四高時代を主たる題材にした彼の代表作のひとつ「歌のわかれ」（一九三九）には、主人公をはじめ、多数の落第生が登場する。つまり「歴史だの正史だの」に縁遠い人たちである。この小説にモデルとしてわが身を提供したうちの何人かはきっと同窓会名簿に名をとどめていないだろう。かつての高等学校は、いわば帝国大学の予備過程で、その存在の全期間を通じて生徒数も概ね同年齢人口の一％を超え出ることはなかった。生徒たちは卒業しさえすれば、ほぼ帝国大学への入学が開かれており、いずれ経済界、政官界、学界などのリーダー、サブリーダーになることが想定されていた。将来のエリートとして街の人たちからもいく分ちやほやされていた。しかし、そうした社会での活動はまだ遠い先のことであったから、高等学校の三年間は独特の猶予期間、人生のかけがえのない内省的な一時期でもあった。学業に耐えられず放り出す者もあるだろうが、なかには才能を生かして文学の道へと踏み出し、ついでに高等教育の階梯そのものから足を踏み外す者が出て来てもおかしくない。二度落第した中野にしても親の心配げな顔がちらつかなかったら、どうなっていたか怪しいものだ。

さて「四高の文芸」を、もし誰か一人にあえて代表させるとするならば、やはり中野重治に落ち着くのではあるまいか。「歌のわかれ」が、地方の高等学校を描いた名作として、誰しもまず指を折る小説だというにとどまらない。彼がなお感覚的にせよ、人間として文学者としての土台を築きあげたのはこの四高時代だったし、逆に彼が雑誌部（文芸部）の委員として活動したその時代は、「北辰会雑誌」を一堂に並べてみれば分るように、その歴史上もっとも充実した時期でもあった。とくに雑誌の第九八号（大正十二年十二月）は、その全体が短歌特集で、短歌隆盛のこの時代にあっても全国的にユニークなものであった。中野の彫った鮮やかな二つの木版画がこの号を飾っている。彼は大正八年（一九一九）九月に入学、十三年三月の卒業だから、大正時代後半のまる四年半を金沢で過した。ロシア革命の影響や大正デモクラシーの波がようやくこの地方都市を洗いつつあった時期だが、近代の内面化を求める時代精神が指針をもっぱら文学へと向けていた独特に文学的な時期でもあって、たとえば高見順が「一九二五年（大正十四年）前後の実に空前絶後というべき同人雑誌全盛時代」（『昭和文学盛衰史』）と呼んでいることなどに重なり合う。中野はそのような時代の雰囲気のなかで、古今東西の文学作品やあらゆる文学雑誌を「かわくように」読み、自分でも短歌を詠み、詩を作り、エッセイや小説を書き、また絵を描き、版画を彫った。ドイツ語に親しみ、詩の翻訳もした。雑誌部は洋画展を試み、短歌会を開催した。これは時に教員も加わる交流の場であった。当時四高の教員には、ドイツの近代文学と取り組む新関良三、木村謹治らがいたし、新進の伊藤武雄（最後の四高校長になる）はより現代的な作品と格闘し、授業中脱線して香林坊で上映中の映画の話などをした。鴻巣盛廣の万葉集講義は中野たちに後々にまで及ぶ深い感銘を与えた。漱石の友人で俳人としても名高い大谷繞石は英語を教えていた。中野の上級には、のちの哲学者高坂正顕や演劇人として活躍することになる北村喜八がいて、雑誌部の先輩でもあった。同期には ― と言っても、二度落第しているから、同期生が三倍いるのだが ― ポーの翻訳で名高い佐々木直次郎（宇都宮書店の入り婿）や「日本茶道史」の著者西堀一三、俳句の大野林火、雪の学者でエッセイストでもある中谷宇吉郎らがいる。そして下級にいた窪川鶴次郎（評論家）、石堂清倫（社会運動家・思想家）、さらに森山啓（作家）らになると、彼らのそれぞれの歩みにとって中野の存在はとてつもなく大きく、いずれも後の活動のなかで中野の盟友となる。

高見順の言う「同人雑誌全盛時代」は金沢も例外ではない。石川県の民衆文化運動を丹念に研究・調査した宮本又久によると、当時の県内同人誌は百種類を越えていた（『石川県社会運動史』）。ここには現物の見つかっていないものが少なからず含まれており、これ以外にも、タイトルすら知られていない多数の雑誌が存在しただろう。四高生たちも街の雑誌にさまざまの形で加わった。岡良一（後に金沢市長）などは、中野の後輩だが、はるかに早熟で、すでに中学時代からいくつもの同人雑誌に関わっていた。中野の場合、村井武雄たちの『成長する魂』、村田俊夫主宰の短歌雑誌『想思樹』、浄土真宗改革派系の『微光』（後に『旅人』と改題）に作品

掲載が確認されている。『微光』＝『旅人』は、暁烏敏や藤原鉄乗のもとに出入りしていた同級生兼落第仲間の得田純朗が編集に携わっていた。これへの中野の寄稿はいずれも「村田浩」というペンネームで書かれており、私は文章を読んで即座に中野のものと確信したが、本人は一九七九年に亡くなっていて訊くこともできず、立証しようとなると容易ではなかった。このペンネームのことはまるで知られていなかった。自分の習作時代の作品を見つけ出されて本人がどこまで喜ぶものか分らないが、いずれにしろ見つけ出されてしまったとあれば観念しただろう。これらの若々しくみずみずしい短歌や小文は最新版の全集に補遺として収録された。さて難題のはずの立証について言うと、実にあっけなく解決した。あるいは問題そのものが解消したと言うべきか。同時期の『北國新聞』から拾い出した「四高短歌会詠草」のなかに、『旅人』掲載の短歌と同じものが中野重治の名で出ていたからだ。これによって中野の最初のペンネームもあわせて確定されたわけである。『微光』＝『旅人』は少なく見積もっても七、八冊出たと想定されるうち、これまでのところ二冊しか見つかっていない。どちらにも中野の作品が載っていることを考えて、同じような可能性をもった他の号の発見への期待は大きい。それらの一つ一つが、のちの作家中野重治の思いがけなく早い多面的な文学活動を示すとともに、四高生の学内外にわたる市民的な交流の証しでもあると言ってよいだろう。

（金沢大学経済学部教授）

19.四高文芸部・大正10年
前列左から2人目が中野重治。

	資料名	年代	所蔵者(場所)
	第3展示室		
117	時習寮看板		四高同窓会
118	時習寮箴規	明治32	四高同窓会
119	超然趣意書	明治39	四高同窓会
120	宣誓名簿	昭和9	四高同窓会
121	時習寮規則		石川県
122	寮生学資保管規定	大正14頃	石川県
123	大正8年時習寮生写真	大正8	個人
124	大正9年時習寮生写真	大正9	個人
125	無声堂での怪談	昭和14	四高同窓会
126	怪談台本		四高同窓会
127	北寮五号室録	昭和23	石川県
128	室録(中寮5号)	昭和20～22	石川県
129	室録(南寮8号)	昭和19·22	石川県
130	昭和5年度卒業生写真	昭和6	金沢大学附属図書館
131	南寮2号窓辺にて	昭和10頃	金沢大学附属図書館
132	四高北辰寮解散(アルバム『超然』より)	昭和24	個人
133	食堂食器 閉校当時のもの		四高同窓会
134	時習寮碁盤		石川県
135	第五十回記念祭飾付プログラム	昭和17	個人
136	四高寮歌集(抄)	昭和31	石川県
137	第四拾四回記念祭写真帳	昭和23頃	石川県
138	時習寮四十一年記念祭絵葉書集	昭和8	四高同窓会
139	時習寮四十二年記念祭絵葉書	昭和9	四高同窓会
140	第四十六回超然祭記念祭絵葉書		石川県
141	第四十六年記念祭記念祭絵葉書	明治39～41	石川県
142	第五十五回記念祭絵葉書		石川県
143	寮祭案内ハガキ(「北斗星」より)	昭和12	金沢大学附属図書館
144	時習寮報 第36·38·40·41·42号	昭和15～17	金沢大学附属図書館
145	日誌	明治38·41 昭和9	金沢大学附属図書館
146	寮務事件綴	明治37～38	金沢大学附属図書館
147	金沢繁盛寿娯六	明治35	石川県立歴史博物館
148	下駄		四高同窓会
149	夏帽子	明治45	石川県
150	夏帽子(経木帽子)		石川県
151	中越義塾看板	昭和15	四高同窓会
152	茅海塾看板		四高同窓会
153	無形塾看板		四高同窓会
154	籠球塾看板		四高同窓会
155	四高野球部誠之塾看板		四高同窓会
156	三々塾アルバム	明治35～昭和16	四高同窓会
157	三々塾塾生名簿	大正3～昭和22	四高同窓会
158	三々塾誌	明治36～昭和17	四高同窓会
159	三々塾創立四拾四年記念誌	昭和14	金沢大学附属図書館
160	富陽塾生写真	大正12頃	個人
161	若越義塾生写真	大正9	個人
162	塾日誌	昭和10～23	四高同窓会
163	旅行部塾生写真	昭和2	四高同窓会
164	有終塾日誌	昭和2～3	四高同窓会
165	金沢市街図	昭和14	金沢市立玉川図書館 近世史料館
166	「ままよ萬年グツ」 (昭和22年6月19日北國毎日新聞)	昭和22	個人
167	追憶	昭和23頃	個人
168	料亭で使用した湯呑·灰皿		四高同窓会
169	宮地のオッサン(漕艇部「漫画帳」)	昭和6	四高同窓会
170	金沢市鳥瞰図	昭和7	個人
171	太鼓		四高同窓会

〈金沢大学資料館展示〉

	資料名	年代	所蔵者(場所)
1	制帽		四高同窓会
2	第四高等中学校学資寄付願	明治19	石川県立歴史博物館
3	第四高等中学校寄付金払戻願状写	明治21	石川県立歴史博物館
4	第四高等中学校寄付金貯金通帳	明治20	石川県立歴史博物館
5	森文相四高開校式演説		金沢大学附属図書館
6	高等学校令(抄)、高等学校規定(抄)、高等学校高等科教授要綱(抄)、高等学校高等科修練要綱		金沢大学附属図書館
7	卒業寮生送別紀念写真	明治45	金沢大学附属図書館
8	卒業記念写真	大正13	金沢大学附属図書館
9	第四高等学校一覧		金沢大学附属図書館
10	第四高等中学校理化学平面前面之図	明治22	四高同窓会
11	第四高等中学校門10分ノ1図	明治22	四高同窓会
12	火鉢·火鉢附台·火箸	明治29	四高同窓会
13	教科書		四高同窓会、金沢大学附属図書館、個人
14	授業プリント	昭和10～20年代	四高同窓会
15	試験答案	昭和20年代	四高同窓会
16	西洋史受講ノート 「The general history by K.Urai」v.1-3	大正11～13	四高同窓会
17	生徒ノート	大正～昭和10年代	四高同窓会, 個人
18	高等学校高等科教授要目	大正10	金沢大学附属図書館
19	帝国大学入学提要 S8年度新版	昭和8	金沢大学附属図書館
20	文部時報 549号-2 "文部省直轄諸学校 入学試験問題並答案講評 特輯"	昭和12	金沢大学附属図書館
21	文部時報 631号-2 "文部省直轄高等·専門諸学校 入学試験問題並答案講評 特輯"	昭和13	金沢大学附属図書館
22	日本全図(東部)	明治10	金沢大学附属図書館
23	新撰恒星図	明治43	金沢大学附属図書館
24	ホワイト氏動物図 第二 (Zoological Charts)	明治初	金沢大学附属図書館
25	蒸氣機関図 第一 (Plans of steam engines)	明治20年代	金沢大学附属図書館
26	侏羅期想像景	明治末	金沢大学附属図書館
27	農作物病害正図 (小麦の腥黒穂病·胡麻病)	明治38	金沢大学附属図書館
28	中古装束直衣		四高同窓会
29	中古装束狩衣		四高同窓会
30	中古装束女官礼装		四高同窓会
31	中古装束文官束帯三位		四高同窓会
32	物理化学教室看板		四高同窓会
33	ミッチェルリッヒ氏検糖計		金沢大学資料館
34	高杯·碗·須恵鉢		金沢大学資料館
35	鉱物標本		金沢大学理学部
36	横穴(石棺造り付)模型		四高同窓会
37	円形古墳(石棺及び石槨付)模型		四高同窓会
38	石棺模型		四高同窓会
39	渾天儀		個人
40	扁額「和魂漢才」		金沢大学附属図書館
41	浦井鍠一郎 世界史講義用ノート	明治30年代	金沢大学附属図書館
42	浦井鍠一郎 「西洋歴史年表」富山房	明治37～40	金沢大学附属図書館
43	書棚		四高同窓会
44	書見台		四高同窓会
45	The encyclopaedia Britannica [9th ed]	1875～1889	金沢大学附属図書館
46	Iconographic encyclopaedia of science, literature, and art /by J. G. Heck	1851～1852	金沢大学附属図書館
47	Milton : an essay / by T. Babington Macaulay	1877	金沢大学附属図書館
48	Physics / by Balfour Stewart [6th ed]	1876	金沢大学附属図書館
49	Chemistry / by H. E. Roscoe	1880	金沢大学附属図書館
50	第四高等学校蔵書印		石川県立歴史博物館
51	蔵書印 DAISHIKOTOGAKKO LIBRAY		四高同窓会

※四高同窓会、石川県となっている資料の現所在は石川近代文学館です。

出品目録

〈石川近代文学館展示〉

	資料名	年代	所蔵者(場所)
	第1展示室		
1	第四高等学校門標		四高同窓会
2	高等中学校資本金醵集趣意書	明治19	四高同窓会
3	高等中学校寄付金募集方委嘱状	明治20	四高同窓会
4	学資寄付願	明治20	四高同窓会
5	第四高等中学校創立基金寄付感謝状	明治23	石川県
6	第四高等中学校創立費寄付感謝状	明治26	石川県
7	創立期の第四高等中学校	明治25頃	石川県
8	四高生写真	明治31～35	金沢大学附属図書館
9	旧石川県専門学校敷地併資産引続書類及目録	明治20	金沢大学資料館
10	第四高等学校学則	大正14	石川県
11	東宮殿下御台覧第四高等学校校旗授与式記念葉書	明治42	金沢大学附属図書館
12	金沢大学創設資料	昭和26	金沢大学資料館
13	紋付羽織		石川県
14	紋付解説原稿		石川県
15	四高生写真	明治26～30	金沢大学附属図書館
16	第四高等学校之印		四高同窓会
17	制帽(4本線)	明治45	石川県
18	制帽(2本線)	明治45	石川県
19	教官制帽		石川県
20	シルクハット		石川県
21	校旗		四高同窓会
22	教官室用柱時計		石川県
23	明治後期の教官室風景		四高同窓会
24	第四高等中学校教授任命辞令	明治25	石川県
25	退職特別金下賜状	大正15	石川県
26	伊藤武雄愛用の文鎮		四高同窓会
27	伊藤武雄遺墨		四高同窓会
28	岡上梁書・扇	昭和17	四高同窓会
29	在学記念　第四高等学校理科甲類第一学年一組	昭和23	個人
30	改訂万葉集精選	昭和9	石川県
31	Three Types of Story Tellers	大正14	石川県
32	西洋史受講ノート　上下	大正12～15	石川県
33	平家物語	大正15	石川県
34	Self-Help		石川県
35	A Fallen Idol	大正9	石川県
36	改訂増補理論応用有機化学	昭和4	石川県
37	改訂増補理論応用無機化学	昭和14	石川県
38	全訂改版要説有機化学	昭和17	石川県
39	生徒ノート	昭和9・16	四高同窓会
40	数学のプリント	大正14～15	石川県
41	魔境		金沢大学資料館
42	第四高等中学校本校平面図	明治22	四高同窓会
43	第四高等学校本館内部工事請負契約書	明治23	石川県
44	第四高等学校絵葉書		個人
45	入学試験問題	昭和23	石川県
46	卒業生送別会記念写真	明治41	金沢大学附属図書館
47	卒業記念写真	大正14	金沢大学附属図書館
48	入学許可証	昭和10	石川県
49	入学料領収証	昭和10	石川県
50	入学者心得	昭和10	石川県
51	身分証明書	昭和10～12	石川県
52	生徒便覧	昭和14	四高同窓会
53	成績表	昭和14	石川県
54	第四高等学校退学許可証	明治23	石川県
55	卒業証	明治22	石川県
56	第一学年点表	明治20	金沢大学資料館
57	第四高等学校一覧		金沢大学附属図書館
58	大正四年第一部新入学生徒誓文帳	大正4	石川県
59	昭和三年文科新入学生徒宣誓名簿	昭和3	四高同窓会
60	第四高等学校模型(1／200)		近代文学館
61	第四高等学校配置図	昭和25	近代文学館
62	校訓(生徒心得)	明治26	四高同窓会

	資料名	年代	所蔵者(場所)
	第2展示室		
63	道場規約看板	大正6	四高同窓会
64	北辰会入部届	昭和10	石川県
65	第四高等学校北辰会共済部特約値段表	昭和10	石川県
66	北辰手帳	昭和16	石川県
67	メダル	昭和9	石川県
68	無声堂印		四高同窓会
69	柔道部写真	明治35～38	金沢大学附属図書館
70	昭和3年の四高柔道部	昭和3	四高同窓会
71	大津商業柔道部コーチとして		近代文学館
72	南下軍	大正4・6	四高同窓会
73	日誌(柔道部)	大正13	四高同窓会
74	南下誌	昭和17～18	四高同窓会
75	第五高等学校柔道部葉書	昭和20	四高同窓会
76	第六高等学校柔道部手紙	昭和20頃	四高同窓会
77	井上靖寄贈柔道着		近代文学館
78	「グラビア プロ顔負けの『特技』大公開」	昭和53	東京大学大学院情報学環
79	考査表	昭和5	金沢大学資料館
80	漕艇部遭難者遺影		石川県
81	ボート部遭難新聞記事	昭和16	四高同窓会
82	第四高等学校水泳プール新設設計図	昭和7	四高同窓会
83	北辰 追悼号	昭和17	石川県
84	故西村潔君・故西村寿君追悼録	昭和16	四高同窓会
85	賞状	昭和8	四高同窓会
86	漫画帳	昭和8	四高同窓会
87	漫画帳	昭和19	四高同窓会
88	練習日誌	大正15～昭和3	四高同窓会
89	北啼厩舎看板		四高同窓会
90	尾水会備忘録	大正15～	四高同窓会
91	第四高等学校水泳部宣誓書	昭和21	四高同窓会
92	剣道部第四回優勝記念写真	大正12	金沢大学附属図書館
93	南下軍剣道大会準優勝メダル	昭和7	四高同窓会
94	旅行部写真帳	大正13～昭和22	四高同窓会
95	記録	昭和6～12	四高同窓会
96	ベースボールスコアブック	大正5	四高同窓会
	野球試合記録帖		
97	意気と感激 対八高戦	昭和3	金沢大学資料館
98	挑戦状	昭和17	四高同窓会
99	学友会雑誌 第1号	明治26	金沢大学附属図書館
100	北辰会雑誌 第1号	明治28	金沢大学附属図書館
101	北辰 148号	昭和15	金沢大学附属図書館
102	四高文芸部写真	大正11	個人
103	北辰会雑誌98号	大正12	石川県立歴史博物館
104	北辰会雑誌96号(マイヨール版)	大正12	石川県立歴史博物館
105	北辰会雑誌96号	大正12	石川県立歴史博物館
106	文芸雑誌 広場 創刊号・2号	昭和4	金沢大学附属図書館
107	Esperez(エスペレ) 創刊号	昭和4	金沢大学附属図書館
108	流水 第5号	昭和7	金沢大学附属図書館
109	飛沫 第10号	昭和17	金沢大学附属図書館
110	北蹄 第2号	昭和17	金沢大学附属図書館
111	誠之会誌 11号	昭和17	四高同窓会
112	剣友 第16輯	昭和17	金沢大学附属図書館
113	右武会誌 第1号	昭和18	個人
114	南下 第7号	昭和16頃	金沢大学附属図書館
115	BERG＝HEIL 8号	昭和7	四高同窓会
116	極星 1号	昭和9	四高同窓会

第四高等学校年表

西暦	年号	四高のできごと	校長	時代背景
1886	明 19	中学校令公布		明18　内閣制度創設
1887	明 20	第四高等中学校創立(4月18日)。医学部設置(8月)。開校式を挙行(10月26日)、森文相臨席。翌日から授業開始	初代:柏田盛文(明20.4-明24.10)	明19　帝国大学令公布
1889	明 22	第1回卒業証書授与式を挙行(7月15日)(木村栄ほか3名)		明22　大日本帝国憲法発布
1892	明 25	金色四稜星の帽章を制定	第2代:中川元(明24.10-明26.1)	明23　教育勅語発布、第1回衆議院総選挙、第1回帝国議会
1893	明 26	本校舎落成式。時習寮開設(10月)	第3代:大島誠治(明26.1-明30.3)	
1894	明 27	高等学校令により第四高等学校と改称(9月11日)		明27　日清戦争
1895	明 28	北辰会結成	第4代:川上彦次(明30.3-明31.1)	
1900	明 33	三々塾設置	第5代:北條時敬(明31.2-明35.5)	明31　金沢城内に第九師団司令部を設置
1901	明 34	医学部を金沢医学専門学校として分離独立(4月)		
1906	明 39	南寮火事(3月19日)、超然主義発生	第6代:吉村寅太郎(明35.5-明44.8)	明37　日露戦争
1907	明 40	第2回南下軍遠征、「南下軍の歌」制作		
1908	明 41	寒潮事件		
1909	明 42	校旗制定		明43　大逆事件
1914	大 3	第1回高専柔道大会で優勝(以後、7連覇)	第7代:溝渕進馬(明44.8-大10.11)	大3　第一次世界大戦
1915	大 4	寮歌「北の都に秋たけて」選定		
1918	大 7	新高等学校令公布	第8代:武藤虎太(大10.11-昭6.1)	大6　ロシア革命 大7　金沢で米騒動
1921	大 10	学年暦を変更し、4月1日始業とする		
1923	大 12	第十臨時教員養成所付設		大12　関東大震災
1926	大 15	同窓会設立		大14　治安維持法公布、普通選挙法成立
1928	昭 3	同盟休校事件(以後、思想問題続く)		
1930	昭 5	指導教官制度設ける	第9代:小松倍一(昭6.1-昭12.8)	
1933	昭 8	腸チフス禍(寮生8名死亡)		昭6　満州事変
1936	昭 11	北辰会プール寄附	第10代:菰田萬一郎(昭12.8-昭14.3)	
1937	昭 12	創立50周年記念式を挙行		昭12　日中戦争
1940	昭 15	北辰報国団結成	第11代:岡上梁(昭14.4-昭18.9)	昭13　国家総動員法
1941	昭 16	漕艇班遭難事件(琵琶湖で部員・OB計11名死亡)	第12代:石井忠純(昭18.9-昭21.3)	昭16　太平洋戦争 昭18　学徒出陣
1944	昭 19	粟ヶ崎血盟事件		昭19　学徒勤労動員通年制実施
1945	昭 20	授業停止(4月)。学校再開(9月)	第13代:鳥山喜一(昭21.6-昭24.7)	昭20　終戦
1949	昭 24	新制金沢大学の設置によって同大学に包括され、名称を「金沢大学第四高等学校」と改称(5月31日)	第14代:伊藤武雄(昭24.7-昭25.3)	昭21　日本国憲法公布
1950	昭 25	四高最後の卒業式(第62回)を挙行(3月25日)。閉校		昭25　朝鮮戦争

(参考文献)「金沢大学五十年史:通史編」、「北の都に秋たけて」、「第四高等学校一覧」

協力者

石川近代文学館
石川県
石川県立歴史博物館
井上靖記念館
金沢市立玉川図書館近世史料館
四高同窓会
東京大学大学院情報学環
西田幾多郎記念館
安達實
在田則子
井上正道
浦城幾世
奥野正幸
喜田惣一郎
木村實
中川耕二
藤岡知夫
古畑徹
本康宏史
山下公一
(50音順・敬称略)

【会　　期】
石川近代文学館　10月16日(月)～23日(月)
金沢大学資料館　10月16日(月)～29日(日)

今回の展示は、かなざわ・まち博2006特別企画「学都の心を再び」の一環として、金沢大学資料館・金沢大学附属図書館が、かなざわ・まち博2006開催委員会との共催で開催した。

編集・執筆者

池上佳芳里
江森一郎
大久保英哲
香川文恵
竹村松男
田嶋万希子
谷本宗生
野村洋子
橋洋平
橋本哲哉
堀井美里
正橋剛二
丸山珪一
吉田政信
(50音順・敬称略)

【写真提供】
表紙、1、4～6、9、12、14……能登印刷株式会社
15……北國新聞社

四高開学120周年記念展示
学都金沢と第四高等学校の軌跡

編集・発行:金沢大学資料館・金沢大学附属図書館
発　行　日:平成18年10月16日
印　　刷:能登印刷株式会社

学都の心を再び